

日蓮大聖人御書全集

そうもくじょうぶつくけつ

草木成仏口決

新版
1777
ゝ
1779

そうもくじようぶつくけつ

草木成仏口決

ぶんえい

ねん

文永9年('72)

がつ

にち

2月20日

さい

51歳

さいれんぼう

最蓮房

と い

問うて云わく、

そうもくじようぶつ

うじよう

ひじよう

うち

草木成仏とは、有情・非情の中、いずれ

ぞや。

こた い

答えて云わく、

そうもくじようぶつ

ひじよう

じようぶつ

草木成仏とは、非情の成仏なり。

と い

問うて云わく、

じよう ひじようとも

こんきよう

じようぶつ

情・非情共に今経において成仏するか。

こた い

答えて云わく、

しかなり。

と い

問うて云わく、

しょうもん

証文いかん。

こた い

答えて云わく、

みようほうれんげきよう

妙法蓮華経これなり。

みようほう

うじよう

妙法とは有情の

じようぶつ

れんげ

ひじよう

じようぶつ

うじよう

しろう

じようぶつ

成仏なり。蓮華とは非情の成仏なり。有情は生の成仏、

ひじよう

し

じようぶつ

しろうじ

じようぶつ

うじよう

ひじよう

じようぶつ

非情は死の成仏、生死の成仏というが有情・非情の成仏

ゆえ

われ

しゅじようし

とき

とうば

た

のとなり。その故は、我ら衆生死する時、塔婆を立てて

かいがんくよう

し

じようぶつ

そうもくじようぶつ

開眼供養するは、死の成仏にして草木成仏なり。

しかん

いち

い

いっしきいつこう

ちゅうどう

止観の一に云わく「二色一香も中道にあらざることな

みようらくい

とも

しきこうちゅうどう

ゆる

し」。妙楽云わく「しかるにまた、共に色香中道を許せど

むじようぶつしろう

みみ

まど

いこう

おどろ

いっしき

も、無情仏性は耳を惑わし心を驚かす」。この「二色」

ごしき

うち

いろ

あお

き

あか

しろ

くろ

とは五色の中には、いずれの色ぞや。青・黄・赤・白・黒の

ごしき

いっしき

しやく

いち

ほっしろう

五色を「一色」と釈せり。「一」とは法性なり。ここをも

みようらく

しきいこうちゅうぶつ

しやく

てんだいだいし

ちゅうぶつ

つて、妙樂は「色香中道」と釈せり。天台大師も「中道

いっしきいっこう

いち

にあらざることなし」といえり。「一色一香」の「一」は、

にさんそうたいいち

ちゅうぶつほつしよう

指

いち

二・三相對の一にはあらざるなり。中道法性をさして一と

いせん

じっかい

さんぜん

えしようとう

具

云うなり。詮ずるところ、十界・三千・依正等をそなえず

しきいこう

そうもくじようぶつ

すなわ

れんげ

ということなし。この色香は草木成仏なり。これ即ち蓮華

じようぶつ

しきいこう

れんげ

ことば

替

そうもくじようぶつ

の成仏なり。色香と蓮華とは、言はかわれども、草木成仏

のことなり。

くけつ い

くさ

き

な

ほとけ

うんぬん

いこう

口決に云わく「草にも木にも成る仏なり」云々。この意

そうもく

な

たま

じゆりようほん

しやくそん

きよう

い

は、草木にも成り給える寿量品の釈尊なり。経に云わく

によらい ひみつ じんつう ちから うんぬん ほうかい しやかによらい おんみ
「如来の秘密・神通の力」云々。法界は釈迦如来の御身に

あらずということなし。

り けんぽん し あらわ みようほう あらわ じ けんぽん しょう
理の顕本は死を表す、妙法と顕る。事の顕本は生を

あらわ れんげ あらわ り けんぽん し うじよう
表す、蓮華と顕る。理の顕本は死にて、有情をつかさど

じ けんぽん しょう ひじよう 司 われ しゅじよう
る。事の顕本は生にして、非情をつかさどる。我ら衆生の

え こえたく ひじよう れんげ われ
ために依怙依託なるは、非情の蓮華がなりたるなり。我ら

しゅじよう ごんごおんじよう しょう くらい みようほう うじよう
衆生の言語音声、生の位には、妙法が有情となりぬる

なり。

われ いっしん うえ うじよう ひじようぐそく つめ かみ ひじよう
我ら一身の上には有情・非情具足せり。爪と髪とは非情な

切

痛

ほか

うじよう

き

痛

り。きるにもいたまず。その外は有情なれば、切るにもいた

苦

いっしん

そな

うじよう

ひじよう

み、くるしむなり。一身の具うるところの有情・非情なり。

うじよう

ひじよう

じゆうによぜ

いんが

にほう

ぐそく

しゅじよう

この有情・非情、十如是の因果の二法を具足せり。衆生

せけん

ごおんせけん

こくどせけん

さんせけん

うじよう

ひじよう

世間・五陰世間・国土世間、この三世間、有情・非情なり。

いちねんさんぜん

ほうもん

振

濯

立

だいまんだら

一念三千の法門をふりすすぎたてたるは大曼荼羅なり。

とうせい

なら

損

がくしや

ほうもん

当世の習いそこないの学者、ゆめにもしらざる法門なり。

てんだい

みようらく

でんぎよう

うち

鑑

たま

弘

たま

天台・妙楽・伝教、内にはかがみさせ給えども、ひろめ給

いっしきいっこう

旬

みみ

まど

こころ

おどろ

わず。「二色一香」とののしり、「耳を惑わし心を驚かす」

囁

たま

みようほうれんげ

い

えんとんしかん

替

とささやき給いて、妙法蓮華と云うべきを円頓止観とかえ

たま

させ給いき。

そうもくじようぶつ

しびと

じようぶつ

ほうもん

し

されば、草木成仏は死人の成仏なり。これらの法門は知

ひと 少

せん

みようほうれんげ

知

ゆえ

る人すくなきなり。詮ずるところ、妙法蓮華をしらざる故

まよ

ほうもん

もうしつ

に迷うところの法門なり。あえて忘失することなかれ。

きようきようきんげん

恐々謹言。

にがつはつか

二月二十日

にちれん

かおう

日蓮

花押

さいれんぼうごへんじ

最蓮房御返事